

2019年1月4日

2019年新年に想う -かけがえのない大学で在り続けるために-

九州工業大学学長 尾家祐二

“未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」”

新年おめでとうございます。

昨年も、皆様方には、本学の教育研究活動にご理解並びにご協力頂きましたこと厚く御礼申し上げます。

さて、昨年は、ノルウェーのサウスイーストノルウェー大学及びスロベニアのリュブリャナ大学を訪問し、教育研究面において、組織的で幅広い連携を行うべく協議を行いました。ノルウェーの人口は約500万人、スロベニアは約200万人と両国とも比較的小規模の国ですが、街並みはとても美しく、両大学ともその街に溶け込むように存在していました。サウスイーストノルウェー大学ではちょうど本学の学生10数名が訪問し、貴重な学びを経験している最中でした。人口規模が小さな国が、存在感を持ち、魅力的であるためには、多くの知恵を備え、活かしていると感じました。ノルウェーで有名な人といえば、画家のムンク、作曲家のグリーグ（グリーグ作曲「ペールギュント」の組曲「朝」は小学生の時に聴きました。とても清らかな曲であったことを覚えています）、劇作家のイプセン、科学者であり探検家のナンセン等を思い浮かべることができると思います。その中で、ナンセンは、北極探検の他、大学教授の職に就き、さらには政治的活動も行った人で、すでに絶版になっていますが彼の功績は「ナンセン伝」（岩波書店）で紹介されています。

昨年は、第一次世界大戦終戦から100年目でした。ナンセンは、戦後のソビエトにおけるドイツ人捕虜の送還に尽力しました。さらには国際連盟難民高等弁務官に就任し、ロシア革命による難民を救うために多くの国々の了承を得て、身分証明書となる「ナンセンパスポート」を発行し、多くの難民が国外へ出ることを可能にしました。国境を越え、人を、国を動かし、想いを実現したのです。その困難さは想像をはるかに超えますし、敬意に値します。

第一次世界大戦終戦から20年程で、第二次世界大戦が起き、その終戦後には、冷戦が始まります。30年前の1989年、日本で平成が始まった年に冷戦の終結を宣言したのは、ゴルバチョフとジョージ・H・W・ブッシュでした。そのブッシュ第41代米国大統領が昨年亡くなりました。30年前の大統領就任演説では『危機的な問題については、結束を。重要な問題については、多様性を。あらゆる問題については、寛容を』という言葉を用い、結束、

多様性、寛容の重要性を国民に語りかけています。

外交問題は大変複雑な問題ですが、日本においても、『1970年代の最後に登場する大平首相が、「文化の時代」がきたということを繰り返し述べたのは、その点で象徴的であった。「経済中心の時代から文化重視の時代に至った」という認識は、ある意味では時代を先取りしていた』（入江昭著「新・日本の外交－地球化時代の日本の選択」（中公新書））と紹介されています。多様な文化を尊重し合う国際交流が盛んになって欲しいと願います。本学では、平成29年度は600名以上の学生が海外の大学や企業において、貴重な学習を経験することができました。国際共同研究も盛んになっています。多くの国々との良好な関係が継続されることを祈念します。

本年、本学は創立110周年を迎えます。この永い歴史の中でご関係頂いた方々に感謝するとともに、過去を振り返り、未来を展望する良い機会にしたいと思います。そして、今後、国際競争力ある教育研究活動を通して、かけがえのない大学で在り続けるために、組織が結束し、寛容な態度で、多様な知恵を活かし続けたいと考えます。

皆様方にとりまして、本年が多くの良い機会に恵まれる年となりますことを祈念し、引き続き本学の活動にご理解、ご協力並びにご支援をお願いしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。